

焰ちゃんのおっぱいに負ける話

俺は秘立蛇女子学園の生徒だ。学園からの指示で抜忍となった焰紅蓮隊の追跡を行い、とうとう本拠地を突き止め、潜入調査を行っている。

「おいそこのお前！お前が報告にあつた侵入者だな？」

抜忍だということだけはあつて、かなりの実力者のようだ。早速侵入したことがバレってしまった。

(バレた、幸い相手は「人戦って乗り切るか」)

俺は戦闘態勢を取る。

「そっさいきりばしな。とりあえず話でもしよっ」

「話だど？話すことなどないー」

「私にはあるんだよ。例えば…お前がさっきから見ている…おっぱいのこととか♡」

(なっ…！しまった、これは乳術っ…ああああああああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡)

焰がぽよんっ♡と乳上げのポーズを取る。思わず目を奪われた瞬間。頭の中をおっぱいが埋め尽くす。

「こつも簡単に引つかかるとはな。男つてのは単純でいい。少しおっぱい揺らしてやるだけで、ほ

飛鳥ちゃんのおっぱいに尋問される話

迂闊だった。超秘伝忍法書を奪う任務を受けた俺は半蔵学園に忍び込んだ。しかし、あと少しの所で罠にかかり、囚われの身となった。今は牢に入れられている。これからどうなってしまうのだろうと考えていると誰かがやってきた。

「調子はどうですか？侵入者さん。情報、話す気になりました？」

ポニーテールの女の子（前に飛鳥と名乗っていた）がやって来て俺に問うた。俺は憤慨しながら答える。

「絶対に話さない。仲間を売るような真似はしない。」

「そういう事言われると、此方としても何をしても聞き出さないといけなくなります。」

「どんな拷問でもしてみろ。俺は絶対に喋らないぞ。」

「じょじょがないですねえ…♡ほら、私のおっぱ・い♡見てくださーい♡♡たゆんっ♡たゆんっ♡

っ♡揺れてっ♡おっぱ♡おっぱ♡

「なっ…♡」

俺は飛鳥のおっぱい…胸を見てしまう。ずっと大きいと思っていた胸。それが今わざとらしくゆっせゆっせと揺れてっ♡。

「あはっ♡ちゃんと見てくれるんだあ♡♡今度は私の言うことを繰り返して下さい♡♡もっと気持ち良くなれますよ♡♡ほっ♡♡ほっ♡♡ゆっ♡♡ゆっ♡♡」

「誰があ…♡そんなじゃあ…♡」

口では否定しても目はおっほっほを追っのをやめない。柔らかな声でしっかりと詰まった大きいおっほっ…まっほっほが離れなご。

「ほっほっほ♡♡気持ちよくなりたいでしょっ♡♡私のおっぱいの動きに合わせてえ…♡言っちゃっほっ♡♡ほっ♡♡ほっ♡♡ゆっ♡♡ゆっ♡♡」

「あぁっ…♡♡ほっ、ほっ♡♡ゆっ…♡♡」

口が止まるなりご。右に左に揺れるおっほっほ♡ダメだと思っごでも目がそらせないでっごるか凝視ごっごっほっ…♡♡

「あははっ♡おめめキニキニはしゃっご♡男の子って本当におっぱいが大好きなんだね♡♡もっ♡思っご♡おっほっ♡♡ほっ♡♡ほっ♡♡ゆっ♡♡ゆっ♡♡」

「あぁ…♡おっほっ…♡♡」

まっ頭がおっほっほのじゃっ杯になった♡飛鳥ちゃんのおっほっ…♡♡♡

「じゃあ、本題に戻っつか♡情報を話ごご♡話ごごくれたらあ…♡」

おっほっほっ♡♡ほっ♡♡ほっ♡♡

「おっほっ♡♡」

日影ちゃんのおっぱいに欲情して…

俺は某所に所属している忍だ。今回の任務は抜け忍である日影の抹殺。難しい任務かもしれないが成功すれば高い評価を得ることができる。必ず達成してやると思いながらターゲットを探し歩いていた。搜索に集中し過ぎていたためか角から出てくる人に気づかず――

ふじょん♡

ぶつかってしまった。何だかとても柔らかい感触がしたが気にしないようにしてぶつかったことへの謝罪を述べようとした。

「すみません！大丈夫ですか…っってお前は日影！」

「ん？わしになんか用か？」

ぶつかった相手はなんとターゲットの日影だった。探す手間が省けたことを考えると運がいい。

「俺は忍！任務でお前を抹殺しにきた！」

「そっつらっつとか…忍転身！」

日影がそう叫ぶと戦闘スタイルに切り替わる。お腹の胸の上半球が丸見えで、ジーンズもびっちりっつらっつでもそそる…じゃない！今は戦いに集中しなければ。

「さへやー！」

気合を入れるため俺がそう叫び、戦いが始まろうとしたその時――

「ちよっと待ってくれへん？」

「はっ？」

日影が待ったを掛けてきた。そもそも忍同士の本勝負に待ったはないような気がするが、思わず攻撃を止めてしまう。いったい、なんだと言っのか。

「なあ、あんたさっきから何でわしのおっばいガン見してるん？」

「なっ…♡そんなこと…♡」

実は凶星だった。さっきからふるふると揺れるおっばいに目を奪われてしまっていた。もしかしたら色仕掛けをしてきているのかもしれない。気をつけなければ。

「嘘や。わしがゆっさ、ゆっさっておっばい揺らせば…ほら、目が追っとる。」

「あっ…♡んっ…♡」

これは色仕掛けだ、気にしないようにしようと思っていたが、本能に抗えず目がおっばいを追っつづ。

「わし、戦う時は本調子の相手とじゃないとやる気せんよ。あんたがわしのおっばい気になってるんやら、気にならなくなってから戦いたいねん。だから、触りたいなら触ってええよ。わし、感情ないっ。」

「んっ…♡」

雪泉ちゃんのおっぱいに負けて奴隷になる話

死塾月閃女学館——名門の忍養成学校として知られている。そこで合同訓練を受けに行った男忍達が行方知れずになるといふ事件が発生していた。真相を解明するため、合同訓練の参加者として俺は月閃女学館に潜入することとなった。

「ようこそ、月閃女学館へ。私は雪泉と申します。」

「ど、どしよ。」

雪泉と名乗った女の子は礼儀正しそうで容姿端麗な子だった。しかし何より——胸が大きかった。高校生離れしていて、少し動くだけでふよんっふよんっ揺れる胸に思わず目を奪われてしまう。また、脚も蠱惑的だった。黒ニーソにむちむちのふともも。男として劣情を感じずにはいられなかった。

「ど、どかしましたか？私の体に何かついていませんか？」

「あっ、いや、なんでもないよ。」

ジロジロ見ていたのを不審がられてしまった。不味い不味い、自分の任務を忘れないようにしなければ。

「そうですね。では一通り校内を案内しますね。」

「ここが1年生の教室で、ここが…」

(はぁ…♡はぁ…♡)

状況が非常に不味い。まず女子校ということがあって、生徒は皆女子である。しかもその女子皆が皆かわいくて胸が大きい…どこを見てもぶるんっぶるんっ揺れている胸がある。何だかとてもいい匂いがするし、理性が危ない。さらに加えて――

「ゆ、雪泉さん…か、体近くないですか？」

「そんなことなげですよ。これが普通です♡」

むむむむむむむむむむ♡♡

(ふぁぁ…♡♡)

雪泉が妙に密着しているのだ。女子校特有の距離感なのかもしれないが男としては女の子の体とくっついてしていると興奮が抑えられなくなってくる…♡雪泉のおっぱい…胸が俺の腕にむぎゅっ押し付けられておりそのやわらかさで何も考えられなくなってしまう…♡髪の毛からはいい匂いが漂ってきて蕩けてしまう…♡そんな状況をなんとか誤魔化しながら過ごした。

「これで一通り案内は終わりましたね。もう遅いので宿舎に行きましょっ。」

「めぁ…」

何とか乗り切れた…一日中魅力的な女体に晒され、極限まで興奮してしまっている。とりわけ雪泉のおっぱい…♡♡一日中味わい続けたあのやわらかい感触…♡♡射精したくてたまらなかった。

紫ちゃんのおっぱいトラップルーム

俺はある諜報機関の忍だ。今回与えられた任務は蛇女子学園に潜入し、内部調査を行うことだ。具体的に何かを調べる訳ではなく、敵情を調査したいようだ。潜入は手慣れたもので一切バレることなく帰ってくることは俺にとっては容易でさえある。問題はどんな情報を掴めるかだ。

「よしよし…」

易々と蛇女への潜入に成功した俺は隠密しながら探索した。特にめぼしい情報は手に入らず、少しがっかりしながらも、もう帰るかと思っていた時、不自然な部屋を見つけた。他に比べて警備や鍵が手薄で、立地的に不便で不自然な場所にある。罠かと思ったが、それらしいものは一切ない。もしかしたらこういう所に何かしらを隠しているのかもしれないと思い、頃合を見計らって侵入することにした。そこは倉庫のようだった。箱が何個か無造作に置かれている以外には何も無かった。とりあえず箱の中身を見るかと箱を開けてみると――

「ぬっ…♡」

ブラジャーが箱ぎっしり詰まっていた。他の箱も同様で大量のブラジャーが入っていた。しかも何だか甘い女の子のにおいがしており、着用済みのものようである。

「なんだこれは…♡」

直ぐに立ち去ろうと思った。しかし、頭の中は目の前にある色とりどりのブラジジャーで一杯だった…♡女の子がつけたであろうブラジジャーがこんなにもたくさんある…♡しかもここは監視が一切されていないようであり、人もまずこないような場所にあった。

「少〜じ〜へ〜び〜ら〜な〜び〜…♡」

そう言っただけはブラジジャーの物色を始めた。少し物色して気がついたのはどれもこれもとても大きいサイズということだ。こんなに大きいサイズの持ち主はそうそういないだろう…♡相当大きいおっぱいなんだらうな…♡そう想像すると興奮が止まらなくなってきた。

「はあ…♡はあ…♡」

我慢できなくなってブラジジャーのおいをかいてみた。とても甘くていいにおいがする…♡♡初めは一つ一つ手に取って顔にあててかいていたが、それでは満足できなくなり、大量にあるブラジジャーをぶちまけて、その中に飛び込んだ。

「ふあぁ…♡♡♡♡♡」

全身がブラジジャーに包まれて、においがより一層強くなる…♡♡甘くて心地良い女の子のおっぱいのおい…♡♡このブラジジャーの持ち主はどんな子なんだろうか…♡♡見たことないくらい大きいおっぱい…♡♡ぽよんっぽよんっとならぶおっぱい…♡♡このサイズのおっぱいなら俺の顔が余裕で埋もれてしまうだろう。あぁ…♡♡そんなことなれば良かったら…♡♡ぼいんぼいんとやわらかいおっぱいが顔を挟み込む…♡♡

「♡♡♡…♡♡♡」

斑鳩さんに蔑まれながら搾り取られる

俺は善忍の卵として日夜修行に励んでいる。明日は昇段試験があり、少し緊張していた。昇段試験は他の受験者との一対一の対戦形式で行われる。相手に勝つことはもちろん、どのように勝つかというところが重要になる。今日、受験者は皆試験会場近くのホテルに宿泊することになっていた。俺はあるルートから明日の対戦相手「斑鳩」という名前らしいが泊まっている部屋の情報を入手しており、これから敵情偵察に行くつもりだった。汚いと言われるかもしれないが、忍者の世界ではこれくらい普通のことだ。俺はバレないように気配を殺して相手の部屋の屋根裏に忍び込んだ。そして、気づかれない程度に部屋の中を覗く。そこには対戦相手である斑鳩と思しき人物が座っていた。さらさらといていても綺麗な長い黒髪に、ムチムチとしたエロティックなボディラインとりわけその大きな胸は殺人的だ。容姿端麗な大和撫子という言葉が相応しい女性だ…そうでは無い。敵の戦い方を一部でもいいから知らなければ。タイミングよく斑鳩が部屋から出ていったので素早く室内に下りて探索する。色々物色していると刀が大切そうに置いてあった。どうやら、斑鳩は刀を使って戦うらしい。収穫があったし、バレる前に帰ろうとすると、あるものが目に入ってきた。

「あ…♡」

それは斑鳩のブラジャーだった。さっき斑鳩を見た時目に焼き付いた大きいおっぱいが想起される…♡理性はそんなこととしてはいけないと警告してくる。が、我慢できずに手に取ってしまう…♡まだ温かい…♡それにいい匂いもする…♡持ち帰ったってバレやしない…そんな考えが脳を埋め尽くす。気がついたら俺はブラジャーを盗んで自分の部屋に帰ってきていた。俺はベッドに横たわる

と斑鳩のブラジャーを顔にあてがった。ものすごくサイズが大きいのがわかったのと、女の子のいい匂いが顔に充満したのとで完全に興奮してしまった…♡

「ふああ…♡斑鳩のおっぱい…♡」

ブラの持ち主である斑鳩の姿を知っていることで妄想に具体性が増す。あのむちむちな斑鳩のおっぱいにばいばいふとされる…♡そんな妄想をしながら、自らのペニスを扱き始めていた。更にこのブラが自分で盗んできたものであること、自分が最低の下着泥棒であることに意識が及び、何とも言えない背徳感で余計に興奮してしまう…♡

「斑鳩あ…♡斑鳩あ…♡」

ドジュッ！ドジュドジュ！ビュルルルル！

射精してしまった…♡明日は大切な試験なのに…♡しかもその対戦相手をオカズにして…♡こんな行為は最悪の行為である。だが、いやそれ故に俺は今まで感じたことのない快感を感じていた。

結局、一度の射精では興奮は収まらず、斑鳩のブラを使って一晩中オナニー勤しってしまった…

翌朝、俺はなんとか試験を受けに来ていた。昨晚オナニーし続けたせいで体が重い。ここに来て昨日の愚行を後悔し始める。しかし、考えていても仕方ない。試験に向けて切りかえていかなければ。

「挨拶を済ませたあと、対戦を開始してください。」

会場にアナウンスが流れる。いよいよ試験開始だ。対戦相手の斑鳩が目の前に姿を現す。昨日、ずっとオカズにしていた斑鳩が…♡

「お、お、お願ひします…♡」

夜桜ママにメロメロになっちゃう話

最近、この街で奇妙な事件が起こっている。ある日突然、精神に異常をきたし、マトモな「コミュニケーション」が取れなくなる人が立て続けに現れている——しかも、その対象は全員男。裏に必ず何かある、そう踏んだ探偵の俺はこの事件を調査していた。

被害者を一人一人尋ねたところ、ハツの共通点が見つかった。皆、何かしらの形で「夜桜」という単語を呟いていたのだ。この「夜桜」という単語を調べたところ、ある人物を表すものとわかった——それも忍者の。忍者といえば現在は観光用のものしか存在しないと言われていたが現実には未だに存在している。その存在が公に語られることは無いが、探偵という職業柄、その存在を認知はしていた。これはとんでもない事件の匂いがするぞと思いつつ、「夜桜」が通っている死塾月閃女学館——これも調査の中でつきとめた——に向かうことにした。

月閃に行くには途中まで電車で移動しなければならぬ。その方面の電車に乗り込むとかなりの乗車率でかなり窮屈だ。これだから満員電車は嫌いなんだと思いつつと前を見ると月閃の制服を着ている子だった。後ろ姿がよく分からないが、おかつぱ頭で、胸がとても大きいかわい子だった。月閃の制服は着衣でも胸の大きさがよくわかるし、黒タイツでピチピチの脚がとても扇情的だ……などと卑猥な考えを膨らませているとさらに人が乗車してきて前にいる彼女と密着する形になった。

(あっ……♡これは……♡)

密着することで彼女の髪の毛が目前にあり、とても甘美な匂いが漂ってきて恍惚としてしまう…
♡そして何より彼女のお尻にちょうど俺の股間に当たっており、その柔らかさに劣情が喚起される…
♡

(勃起したらまずい…♡)

幸い周りからはよく見えない位置にある。しかし、これはもう痴漢と言われても言い逃れできない。
必死に勃起だけは我慢しようとするが、女の子に耐性がない俺はお尻の柔らかさとぬくもりに耐え
きれずすぐに勃起してしまった…♡

(まずい…♡これじゃ変態だ…♡でも抑えられない…♡)

理性に反して俺のペニスはどんどん硬くなっていき、完全に発情してしまった。してはいけないこ
とをしている背徳感で興奮がさらに高まってしまふ…♡その時、俺は前の彼女から腕を掴まれた。
痴漢として告発されるのだ、そう確信した次の瞬間――

「えっ…♡」

彼女は声を上げるわけではなく、俺の手を自らその豊満なおっぱいへと導いた。手のひらの中に柔ら
かい感触が爆発し、ますます劣情が煽られる。理性が理解不能だと混乱する中で、本能は目の前の
柔らかい感触に極限まで興奮してしまっていた。

(なんだこの状況…♡絶対おかし…ああっ♡柔らかい…♡女の子の体ってこんなふわふわで、むち
むちなんだ…♡)